

過去が咲いてゐる今、
未来の蕾で一杯な今

没後50年

河井寛次郎展



青瓷鱗血葉文花瓶(1923年頃)
個人蔵



三色打薬手壺(1965年頃)
個人蔵



柿釉丸紋隅切鉢
(1939年頃)
河井寛次郎記念館蔵



二彩双龍耳壺(1923年頃)
山口大学蔵

平成30年
1/2(火) ~ 2/25(日)

※会期中無休

- 開館時間
午前9時30分~午後5時30分(入館は午後5時まで)
- 入館料
一般1,000円(4枚セット券3,000円)/大学生800円
高校生500円/中学生以下無料
- 主催
公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム
毎日新聞社
- 後援
中日新聞社、朝日新聞社、NHK津放送局
三重テレビ放送
- 協賛
大伸社

記念講演会

1月21日(日) 午後2時~

講師: 鷺 珠江氏(河井寛次郎記念館・学芸員)

没後50年

河井寛次郎展

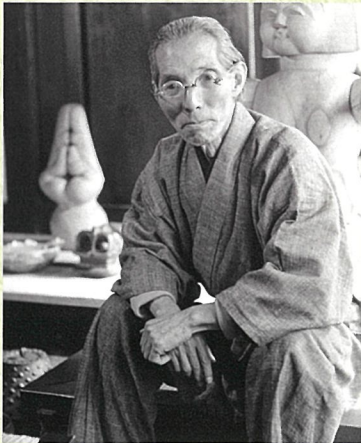
過去が咲いてゐる今、
未来の蕾で一杯な今

陶芸家・河井寛次郎(かわいかんじろう/1890~1966)。1890(明治23)年、鳥根県安来市に生まれた寛次郎は、1910(明治43)年に松江中学校を卒業後、東京高等工業学校(現・東京工業大学)窯業科に入学。雑誌「白樺」が主催したバーナード・リーチの新作展を見て感銘を受け、後に交友を結びました。また同校では後輩の濱田庄司と出会い、生涯の友人となります。

卒業後は京都市立陶磁器試験所で技師として研鑽を積み、1920(大正9)年、京都市五条坂の清水六兵衛の窯を譲り受け、「鐘溪窯」と名づけ住居を構えました。翌年の初個展以来、高度な技術を駆使した中国や朝鮮古陶磁の手法に基づいた作品が好評を博しますが、次第に自らの作陶の在り方に疑問を抱き、1924(大正13)年、濱田庄司を介して柳宗悦と親交を結ぶと、それまでの作風を一変し、実用を重んじた力強い作品を生み出してきました。

1926(大正15)年に「日本民藝美術館設立趣意書」の起草に参加し、柳や濱田と民藝運動を推進し多くの工芸家を牽引していきました。1936(昭和11)年に「日本民藝館」が開館されると理事に就任。戦後は、色鮮やかな釉薬を用いた重厚で変化にとんだ独自の作風を確立する一方、実用にとられない、自らの内面から湧き出る自由で独創的な造形表現を展開し、その卓抜した芸術性は、没後50年を迎えた今なお国内外で高い評価を受けています。

本展では、京都の旧宅であった河井寛次郎記念館所蔵作品を中心に、本邦初公開となる山口大学所蔵作品など陶芸や木彫や書、調度類などを紹介し、寛次郎の仕事の全貌とその深い精神世界を辿ります。



緑釉人形図壺
(1923年頃)
山口大学蔵



青瓷鱗血文桃注
(1922年頃)
河井寛次郎記念館蔵



灰釉筒描扁壺
(1953年頃)
河井寛次郎記念館蔵



流し薬瓶子
(1927~28年)
兵庫陶芸美術館蔵(北後豊子氏寄贈)



繡花六方花瓶
(1923年頃)
山口大学蔵



竹製棚[デザイン]
制作・日本竹製寝台製作所(1940年頃)
河井寛次郎記念館蔵

次回展示のお知らせ

会期 平成30年3月1日(木)~4月15日(日) 布で描いたアプリケ芸術 宮脇綾子の世界展

宮脇綾子(みやわきあやこ/1905~1995)は身近なものを豊かな感性で捉え、端切れや古裂をはじめ様々な布で表現した「アプリケ」の作家です。洋画家・宮脇晴との結婚を機に名古屋に移り住み、制作を始めたのは終戦を迎えた40歳を超えてからでした。作品のモデルは庭の花、野菜、魚など身近なものを「あ」と驚きの心で見つめ美しいと感じたものばかりです。写生を重ねてこそその細密さと、新鮮な発想による素材の組み合わせが大きな魅力です。愛情あふれる作品の数々をお楽しみください。

■お車をご利用の場合/東名阪「四日市I.C.」より国道477号(湯の山街道)を湯の山方面へ約6.5km。 ■無料駐車場有り(普通車100台、大型バス駐車可)
■電車をご利用の場合/近鉄「四日市駅」下車、近鉄湯の山線に乗り換え約25分、「大羽根園駅」下車、西へ300m。 ■全館バリアフリー、車椅子常備



paramitamuseum

公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム 〒510-1245 三重県三重郡菟野町大羽根園松ヶ枝町21-6
Tel.059-391-1088 Fax.059-391-1077 E-mail office@paramitamuseum.com
http://www.paramitamuseum.com Facebook www.facebook.com/paramitamuseum Twitter @paramita_muse

パラミタミュージアム 検索